



株式会社 五霞まちづくり交流センター 茨城県の西の玄関口「道の駅ごか」から 地域の魅力を発信



株式会社 五霞まちづくり交流センター
代表取締役社長 **染谷 森雄** 氏

2005年4月、茨城県内では9番目の道の駅となる「道の駅ごか」が新4号国道沿いにオープンした。地元産の新鮮な農産物や茨城県の特産品であるローズポークなどを取り扱い、2017年には累計利用者数が1,000万人を突破するなど、地元の人気スポットとなっている。道の駅ごかは圏央道の五霞インターチェンジと新4号国道が交わる交通の要衝の地にあり、茨城県の西の玄関口としても位置づけられている。

道の駅ごかは、五霞町や地元のJA、商工会などが協同出資した「株式会社五霞まちづくり交流センター」が運営しており、2代目の代表を務めているのが、五霞町の染谷森雄町長である。道の駅ごか開設の経緯や、これまでどのように集客アップを図ってきたのか、またコロナ禍の現状をどう乗り切ろうとしているのかなどについて、お話をうかがった。

LEADER'S PROFILE

1947年、茨城県五霞町生まれ。生家は五霞町で乳牛を育てる酪農家で、4人兄弟の長男として子どもの頃から毎日自分の手で搾乳し、家業を手伝っていた。64年3月、茨城県畜産試験場研修生課程を修了し、翌65年から染谷牧場の経営に携わる。94年5月から2007年4月までJA茨城むつみ農業協同組合の常任理事を務めながら、95年4月からは五霞町議会議員を3期務める。2007年5月に五霞町長に就任し、現在4期目。町長就任と同時に、株式会社五霞まちづくり交流センターの代表を兼務。座右の銘は「地道誠実」で、何事も地道に真心を持って取り組むことをモットーとしている。

地元生産者とともに

——「道の駅ごか」設立の経緯を教えてください。

五霞町は北東部が利根川に面しており、町の中央部を新4号国道が縦断し、昼夜を問わず自動車がひっきりなしに行き交っています。利根川には、1981年4月に新利根川橋が開通しており、当初は建設費用回収のため、通行料金が課せられていました。

その新利根川橋の通行料金の徴収期間が2001年4月に満了を迎え、料金所が撤収されるのを機に、当時の大谷隆照町長を中心として、「料金所の跡地に町の特産品を直売できる施設をつくらう」という話が持ち上がりました。当時私はJA茨城む

つみ農業協同組合の常任理事を務めており、相談を受けて一緒に国に陳情に出向いたりもしました。

そうしたなかで、進められたのが「道の駅」整備事業です。当時、最寄りの道の駅というと、埼玉県春日部市にある「道の駅庄和」が整備を進めておりましたが、福島県二本松市の「道の駅安達」まで空白地帯となっていました。国道利用者の利便性向上を考えていた国側にとっても願ってもない話で、「ぜひ道の駅の整備を進めて欲しい」との要望を強く受けました。場所も料金所の跡地ではなく、圏央道のインターチェンジに隣接する場所にしたらどうか、との提案をいただきました。

——2005年4月のオープンまでの間は、どのような準備をされていたのでしょうか。

五霞町の一番の特産品といえば農産物です。当



農産物直売所「わだい万菜」



茨城物産販売所

時、町内の生産者は米作農家がほとんどで、自分たちで直売する経験はありませんでした。そこで「直売を学んでみよう」ということになり、JA 茨城むつみ五霞支店の敷地内にあった野菜直売所「四季菜館」の機能を強化しました。五霞支店のなかに、米や蕎麦、野菜などの部会を新たに立ち上げ、質の高い農産物を安定して直売できる体制を整えていきました。すると四季菜館は年間 3,000 万円以上も売り上げるようになり、道の駅での直売に向けて大きな自信を得ることができました。

こうした経験を得て、五霞町が確保したインターチェンジの予定地に隣接する約 2 万㎡の土地に道の駅ごかを開設し、農産物直売所「わだい万菜」がオープンしたのです。現在、「JA 茨城むつみ道の駅ごか農産物直売所販売組合」に所属する約 140 人の組合員が自分たちが生産した農産物を直接販売しております。

——駅の運営者として 2004 年 10 月に設立されたのが「株式会社五霞まちづくり交流センター」ですね。

運営にあたっては、自分たちの道の駅を自分たちの手で運営していくことを目的に、地方公共団体と民間企業が出資する第 3 セクター方式を選択しました。五霞町が 50% 以上出資し、JA 茨城むつみ、五霞工業クラブ、五霞町商工会にも出資いただいております。初代の代表には大谷前町長が就任され、2007 年 5 月に町長となった私が 2 代目として引き継ぎました。いま大半の道の駅は飲食店や物販などの業務を外部へ 100% 委託し

ており、私たちのように自ら運営するケースは珍しく、成功例として関係者の間で注目される存在にもなっています。

道の駅ごかの運営において最も大切にしていることは、お客様目線での商品の提供です。良い野菜を作ってくださいる生産者の皆さんの協力なくして、道の駅ごかの成功はあり得ません。そのため、わだい万菜では農産物を直売する際の手数料も、一般のスーパーマーケットより低く抑えられています。

数々のオリジナル商品を開発

——道の駅は、いまでは全国に 1,194 駅を数え、特色を出そうと各駅で懸命な努力が行われています。道の駅ごかでは、どのような取り組みをされていますか。

わだい万菜では新鮮さを一番の売りにしており、早朝に収穫した農産物を持ち寄って朝 9 時から販売を始めています。新鮮さを求める利用者の方が多く、売れ残ることはほとんどありません。農産物に加え、いま道の駅ごかの人気商品の一つになっているのが、茨城県の銘柄豚「ローズポーク」です。

もともと茨城県は全国で有数の養豚県であり、そのなかでも指定された飼料で育てるなど、厳しい条件をクリアした豚だけに与えられるブランドがローズポークです。弾力がある肉質で、きめの細かい脂身が入っているのが大きな特徴です。飼



レストラン「華こぶし」の人気メニュー
「ローズポークとんかつ定食」

育に手間暇がかかるため、養豚数が限られ、週4日しかない入荷日にはショーケースに入れた途端に売り切れてしまいます。

——ローズポークを100%使った肉まん「ローズポークまん」も人気だそうですね。

単に農産物や畜産物をそのまま販売するのではなく、加工することでさらに付加価値を高め、特徴を出していくことに取り組んできました。そして、交流センターの職員のアイデアで誕生したのがローズポークまんでした。2008年には商標登録を行い、同じ茨城県内の道の駅や、県内有数の観光地である筑波山のつつじヶ丘レストハウスなどでも販売されています。



ローズポークまん



五霞いもコロッケ

五霞町の特産品では、里芋の一種である「八つ頭」もあり、これを加工した「五霞いもコロッケ」も人気商品です。五霞町商工会が持っていたレシピをベースに、栄養士を交えてさらに栄養価を高めるなどの工夫を加えて販売に至りました。八つ頭を使った雑炊やポタージュスープなどのレシピも開発されています。商工会を含めた町全体で「五霞いも」というブランドを立ち上げ、多くの人に知ってもらう取り組みを進めているところです。

——五霞町は米や蕎麦の産地としても知られています。

五霞町の主要品目の米は、JA 茨城むつみの主導で98年に発足した「五霞町うまい米づくり実践委員会」で、有機肥料を100%使用し、農薬の散布も除草の1回にとどめるなど、安心・安全な米づくりに努めるとともに、米のおいしさを測定する食味計を独自に購入し、管理徹底することで「特別栽培米」として、新潟県魚沼産に引けをとらない食味値80以上の米を毎年販売しています。

米と麦に次いで栽培面積が広く、主要な農産物となっているのが蕎麦で、茨城県のブランドである「常陸秋そば」の名で知られるようになっています。JA 茨城むつみが立ち上げたそば組合が、蕎麦の生産を第一線で担っています。

道の駅ごかでは、そば組合が製粉したそば粉を販売しているほか、レストランでは風味豊かな「手打ち蕎麦」を提供し、人気メニューの一つとなっています。また、2013年にはそば生産者とJA 茨城むつみが中心となって「五霞町そば焼酎振興協議会」を設立し、常陸秋そばを100%使用した蕎麦焼酎「川霞」を商品化しました。五霞町のふるさと納税の返礼品にも採用されており、生産した本数は毎年完売に近く好評を博しています。

東京オリンピック効果で人気の新施設

——今では「道の駅ごか」の駐車場は、常に数多くの車で埋め尽くされているそうですね。

駐車場では茨城県内だけでなく、関東一円のナンバーを付けた車を数多く見かけます。利用され



るお客様の特徴としては、リピーターのお客様が多いことがあげられます。一度食べていただいた新鮮な野菜の味が忘れられず、二度、三度と来訪してくださっているようです。

2015年3月に圏央道の五霞インターチェンジが開通し、さらに2017年2月に茨城県内で圏央道が全線開通したことで、利用者の増加に弾みがつき、この年の8月には累計利用者1,000万人の大台を突破しました。この人数は店舗レジを通過した方だけをカウントした人数なので、ご家族連れの方や休憩だけの方などを含めると、実際にはその2倍、3倍の方が利用されているはずです。

——新型コロナウイルス感染拡大の影響はどうでしょうか。

新型コロナウイルスの感染拡大にともない、2020年度は営業自粛を余儀なくされるなど大きな影響を受けました。2019年度に約76万人だった利用者数は、2020年度に約60万人まで大幅に落ち込んだのです。そのため、売上高も前年度比1割以上の減収となりました。

今はコロナ禍の落ち着きとともに徐々に利用者数も戻り始めていて、2021年度の利用者数は前年度を若干上回り、売上高も回復傾向にあります。2020年12月には道の駅ごかの北側に隣接する調整池内に新たな広場「Street sports park Goka（ストリートスポーツパーク・ゴカ）」もオープンしました。以前から調整池の有効活用案をいろいろと検討していたなかで、スポーツ施設への転用が実現したのです。こうした効果で、今年のゴールデンウィーク期間中の利用者数も前年実績を上回り、回復に向けて確かな手応えを感じているところです。

——スポーツパークの内容について詳しく教えてください。

ストリートスポーツパーク・ゴカには、約5,300㎡ある調整池の敷地内に、スケートボード、スラックライン、3×3(スリーエックススリー)の3つのエリアを整備し、子どもの遊び場と休憩スペースも設けました。スケートボードエリアには、カーブボックス、角パイプレール、ジャンプ台など、本格的なセクションが設定されています。また、

STREET SPORTS PARK GOKA



「ストリートスポーツパーク・ゴカ」（上空より撮影）

細いベルト状のラインに乗りバランスをとって楽しむスラックラインエリアは、関東初の一般社団法人日本スラックライン連盟認定パークとなっています。そして、3×3エリアでは、3人制バスケットボールが楽しめるようになっています。

無料で一般開放されていることもあって、オープン当初から盛況でした。東京オリンピックのスケートボード競技では、男子ストリートで堀米雄斗選手が初代王者に輝いたり、13歳の西矢椛選手が日本最年少の金メダルを獲得したりと、日本人選手が大活躍したことも大きな追い風となりました。スケートボード人気が一気に高まり、週末の賑わいが一段と増しています。

——スポーツパークの整備にあたっては地元企業の協力も仰いだそうですね。

総事業費は約3,500万円で、包括連携協定を結んでいる五霞町の特殊塗装会社染めQテクノロジーの協力と、地方創生臨時交付金を活用し整備いたしました。スケートボードの滑りをよくするため、コート表面の凸凹をできるだけ少なくする施工をお願いし、利用者の間からは「他の施設よりも滑りやすい」と大変好評をいただいております。

染めQテクノロジーには、それ以前にも公共施設の老朽化対策だったり、学校や福祉施設への新型コロナウイルス対策の抗菌製品の寄付をいただいたりと、多方面でご協力いただいております。2019年には道の駅ごかの屋根にも特殊塗料「遮熱ROOF」を一面に塗布くださり、その



五霞米みそ

うえ圏央道を走っていても遠くからわかる大きな「GOKA」の文字まで描いていただきました。遮熱効果の低い薄いトタン張り屋根のため、それまで夏にはクーラーが効かないほど熱くなっていましたが、おかげで改善されました。

将来に向けた新たな取り組みとは

——最近の新商品開発の動きについて教えてください。

新しい事業を創造していく新たな部署として、2021年4月に「ごかみらいLaB（ラボ）」を新設し、町から出向した職員2名と交流センターの職員2名が現在活動しています。

ラボではふるさと納税の返礼品に着目し、町内企業と連携して掘り起こしを行い、取扱品目を約5倍にしたほか、茨城県でも生産が盛んなサツマイモに着目し、町内で先進的に6次化製品を製造する農業法人の支援を受け、焼き芋や冷凍焼き芋の販売に取り組み、道の駅の売上アップに貢献しています。

また、五霞産米と大豆を原料にした「五霞米みそ」を今年1月に商品化しました。税込で500g・360円、1kg・680円で販売を始めたところ、4月中旬には300kg以上を売り上げ、完売となりました。今年も夏前には味噌造りを進めてもらう予定で、この五霞米みそを使った豚汁やけんちん汁も販売し、集客アップにつなげていきたいと考えています。

——五霞町には5つの工業団地があり、大手の工場にはたくさんの見学者が訪れ、賑わっていたそうですね。

五霞町で代表的なのは、キューピーとヤクルトの工場です。キューピーの五霞工場では、原料となる卵を1分間に600個も割る「高速割卵機」が稼働していて、初めて訪れた見学者の方はとても驚かれます。工場の天井にはキューピーの絵が描かれていて、小さなお子さんも楽しめ、年間2万人の見学者が訪れていました。ヤクルトの茨城工場では、パック詰め作業を見学できるほか、ヤクルトを飲みながら同社の歴史やヤクルトに含まれているシロタ株について学ぶことができます。

どちらの工場もコロナ禍前は学校や団体などが大型観光バスで見学に訪れ、途中の休憩やランチなどで道の駅ごかにも立ち寄っていただけました。また、ほとんどのコースにも組み込まれ、同じように休憩やランチなどに立ち寄っていただき、飲食や特産品の販売につながっていたのです。1日でも早くコロナ禍が収束し、工場見学需要が回復してくれることを期待しています。

——「道の駅ごか」のある「ごかみらい産業団地」も、さまざまな企業の進出が決まり、建屋の整備も徐々に進んで景色が変わりつつありますね。

ごかみらい産業団地に続く新しい開発地区の選定も現在進めています。また、埼玉県八潮市を起点として、越谷市を経て春日部市内で国道16号に至る東埼玉道路は、圏央道の五霞インターチェンジまで延伸する調査費の計上も決定しており、いずれ実現することになるでしょう。これらによって交通の利便性がさらに向上し、企業誘致に弾みをつける狙いがあります。

そうしたことを念頭に置くと、2020年12月に五霞町が取得した道の駅ごかの北東側の土地をどう活用するかがとても重要になってきます。現在、活用プランについてさまざまな企画案が持ち上がっており、民間事業者の活力を取り入れた事業展開を鋭意進めているところです。

現在の五霞町にはない宿泊施設の建設などもプランの一つとして検討の余地があると思っています。



アクセス

- お車の場合：首都圏中央連絡自動車道／圏央道 五霞I.C.より1分
- 電車の場合：JR宇都宮線 栗橋駅下車（東口）より タクシー 20分
東武日光線 幸手駅下車 タクシー 10分
- 電車 バスの場合：東武日光線 南栗橋駅下車（東口）よりコミュニティバスごかりん号 約25分

す。企業が増えれば出張等で訪れる人が増え、それらの受け皿づくりは、五霞町全体の発展へつながっていくことでしょう。

——最後に、今後の「道の駅ごか」を含めた町づくりにおけるお考えを教えてください。

先ほどの特殊塗装会社染めQテクノロジーをはじめ、五霞町に拠点を構える地元企業は自ら率先して町づくりに参加してくださっています。例えば、町をあげた一大イベントである「五霞ふれあい祭り」では、社員の皆さんが自主的に企画段階から関わり、アイデアを出しながら町民と一



取材後記

武蔵野銀行 五霞支店
河西 高志 支店長



株式会社五霞まちづくり交流センター様（第三セクター）が運営されている「道の駅ごか」は、2005年の開業以来、一般的な「道の駅」とは一線を画した存在感を放ち続けております。地理的に茨城県の西の玄関口にあたることから、地場産品のみならず茨城県内全域の名産品を取扱っており、圏央道五霞IC至近かつ新4号国道沿いという好立地も相まって、商圈（顧客層）も広範囲に及びます。構内の農作物直売所には開店前から地元住民の行列ができるなど「町民の台所」としての機能も有し、当地のランドマークとして、地方創生（にぎわい創出）の面で重要な役割を担っております。

2020年12月には、隣接地に「Street sports park Goka」（無料・予約不要）をオープンいたしました。東京オリンピックの正式種目となり人気を集めたスケートボードエリアのほか、スラックラインエリアやバスケットボールエリアも設けられ、ストリートスポーツを満喫できる多目的広場として、若者を中心に好評を博しております。

当行が様々な場面で株式会社五霞まちづくり交流センター様のお役に立てるよう、これからも尽力していく所存です。

緒に汗を流してくれています。企業、住民、行政が一体となり、協働での町づくりが根付いていることがこの町の一番の強みです。こうした絆をこれからも大切に、三位一体となって五霞町の良さを全国に発信していきたいと考えております。

■株式会社五霞まちづくり交流センター 概要

設立：2004年10月

従業員：約60名

本社所在地：茨城県猿島郡五霞町ごかみらい13-3

事業内容：道の駅ごか運営

取引店：五霞支店